

長いものに巻かれない～ダイバーシティのすすめ～ 渥美由喜氏講演会を開催しました

2015年10月23日（金）、本学3号館301教室において、企業のワークライフバランスマネジメント、ダイバーシティ研究の第一人者である渥美由喜さん（厚生労働省政策評価に関する有識者会議委員）をお招きし、講演会を開催しました。200名を超える参加者があり、“イクメン”から“イキメン”を目指す渥美さんのお話を、1時間半にわたって聴き入りました。

渥美さんはこれまでも何度か、早稲田大学でご講演くださっていましたが、今回は、ご自身が抱える障がいのお話も交え、ダイバーシティ推進に必要な他者への思いやりの気持ちの大切さ、ワークだけでは得られない体験の数々を熱く語ってくださりました。

講演は、ご自身の発達障がいというマイノリティー体験から始まり、息つく暇もないほど内容の濃いお話が続きました。就職後の挫折、発想の転換でオフの時間の価値を発見したこと。最初に就職した会社では、ワークライフバランスの研究をやらせてもらえずオフの時間にやっていた研究が、今では第一人者とされていること。2回の育児休業と育児・家事体験からは、女性社会で一人浮いた存在（マイノリティー）になる体験をし、パートナーをリスペクトする大切さ、相手を主語にして考え、「今、俺は大変なんだ」ではなく、「君も大変だよ」と言うだけで、夫婦関係がスムーズになることを発見したこと。自分の子どもを育てるだけの「イクメン」から、地域の子どもの育てる「イキメン」になることの大切さ。ボランティアで主催する子ども会での経験や幼少期の体験からは、近所の子どもの見守る大人、ガンジイ（頑固なジジイだけれども、子どもたちを温かく見守り、時に叱ってくれた存在）の必要性、子どもには、親や兄弟姉妹の家族関係（タテの関係）でも、友人関係（ヨコの関係）でもない、ナナメの関係が必要だということ。ご尊父の介護とお子さんの看護からは、介護と子育て、看護を同時にやるのは、「大変」ではなく相乗効果として捉え、双方にとってかけがえのない存在であることに感謝していること。特に、お子さんの看護からは、辛い中でも「良かった」探しをし、「生まれてきてくれて良かった」と1日1日を大切に過ごしていること。小児病棟で出会った少女の健気な思いやりを振り返り、自分自身が困難な時こそ、周りを照らすことができる人になる大切さなど、渥美さんお一人の人生とは思えないほどの数多くのエピソードとともに、心に響く言葉が溢れました。



ほぼ満席の会場。「今までに受けた大学の講義の中で3本の指に入くらい有意義なお話だった」という感想も。

参加者からは、「とても充実したお話で、人生を学べる講演でした。もっとお話を聞きたかった」「今まで生活していただけでは知れなかった、気づけなかった世界に触れることができた。育児は母親だけの仕事ではないという強いメッセージが印象的だったが、感じたことは尽きない。素晴らしい機会をありがとうございました」といった声が多数寄せられました。